

## グローバル化した世界への多国間主義的解決策

私たちはグローバル化して相互連関性がますます強まりつつある世界を生きており、アイデア、情報や技術が広まる速度はかつてないほど速くなっている。グローバル化した経済は複雑で相互に絡み合った資本と取引の流れのネットワークを作り出した。それによって経済面での大きな利得がもたらされ、世界中の数億人の人々が貧困の淵から引き上げられた。だが、長期化する世界金融危機から分かるように、世界が相互に結びつきを深めることは恩恵とともに深刻なリスクももたらす。一瞬にしてコミュニケーションできるということは、感染が急速に広がる深刻なリスクももたらすのである。よって、世界的な経済の一体化が、各国マクロ経済政策の協調とその規制制度の調和の整合性を持った組み合わせによって支えられ、こうした政策協調と制度の調和がグローバル金融システムの脆弱性に対処することは、大きな公共の利益につながる。

今回のF&D誌は、相互連関性のさまざまな側面を考察する。シンガポール大学リー・クアンユー公共政策大学院の院長で、もうすぐ発表される著作「偉大なる収斂：アジア、西欧、そして1つの世界という論理（The Great Convergence: Asia, the West, and the Logic of One World）」の著者でもあるキショア・マブバニ氏は、地球村と呼ばれるようなグローバル共同体の世界では、気候変動のような大きな新しい問題に対してますます全世界的な解決策が求められるようになっていくと述べる。

国連開発プログラムの前総裁で、現在、ブルッキングス研究所の副所長であるケマル・デルビシュ氏は、東西の大きなバランス調整につながっているグローバル経済の3つの根本的な変化に着目する。同氏は、未来の世界はどの時代より多極的で相互依存を強める世界となるだろうと述べ、国際機関において途上国や新興経済国がより大きな役割を演じるよう呼びかける。

「ストレートトーク」コーナーでは、IMFのラガルド専務理事が、世界金融危機のマッピングや金融セクターと「実物」経済の関係についてのマッピングでIMFは進展しつつあるものの、おそらく最大の課題は各国の政策立案者たちにグローバルな視点を持つようにさせることであると述べている。

アジア開発銀行の河合正弘研究所長とオックスフォード経済政策研究所のドメニコ・ロンバルディ所長は、グローバル経済の安定性を支える役割を果たす地域的協定の増加について考察する。

また、本号は世界銀行初の新興経済国出身のチーフ・エコノミストであるジャスティン・イーファー・リン氏を紹介する。リン氏は持続可能な発展を再考する方法としての新構造経済学について解説する。

他に、ミャンマーがグローバル経済にどのように再統合されつつあるかの考察、ヨーロッパでの金融セクターへの課税拡大に関する提案にも検討を加える。